巻頭言

森林の多面的機能研究のすすめ

研究管理官　　桜井　尚武

「地球環境・人間生活にかかわる農業及び森林の多面的機能の評価について」平成１２（２０００）年１２月１４日に農林水産大臣が日本学術会議に諮問した答申が，平成１３（２００１）年１１月１日に報告されました。農業と林業における生産活動及び森林の管理活動がもたらす，農産物や林産物の生産以外の機能の，外部経済化されている多面的機能の価値の定量評価手法や今後の調査研究の方向等を提案したものです。全文を「http://www.scj.go.jp/info/data_18_4.html」で見ることができます。

農業は食料を生産し，林業は燃料や木材を生産して生命と生活を支えてきました。また，森林を利用管理することで，生活基盤である水や環境の保全を確保してきました。農産物や林産物のように経済市場の場で評価されるものの価値は分かりやすいのですが，その生産管理活動に付随して生じる公益的機能等多面的な機能の価値は大変評価しにくいものです。特に，空気や水，自然環境のようにいくらでもあってその存在自体がヒトの生存環境を作っているにもかかわらず，直接実感し得ないものの価値は理解すること自体が困難です。多面的機能があってはじめて私たちが生きているわけですから，あるのが当たり前なものであって，ありがたいという認識をすることができない，ないという条件を考えることができないものなのです。ところが，２０世紀の終わりなって，このあるのが当たり前のものが，実は当たり前といえなくなってきているということに多くの人が気付きました。

硫黄の大気中への放出の例では，人為活動により大気中に放出される硫黄量は産業革命以後増加して，１８６０年頃には自然の放出量の1/30程度になりましたが１９４０年代には自然の放出量に肩を並べ，現在ではその３倍にもなって，人類の活動が自然を凌駕したといいます（武田邦彦，2000）。これは同時に人間活動が自然の受け持ってきた浄化システムを破壊してしまったことを意味します。レイチェル・カーソンは「沈黙の春」で綿密な観測の結果このことに気づいて警鐘を鳴らしました。このように，ヒトの存在を可能にしてきた環境をヒト自らが壊して，危険な状態に踏み込んで迎えたのが２１世紀だというわけです。

おそらく，多くの人はまだそのことをそれ程深刻に受け止めてはいないでしょうし，今回の多面的機能評価に関する答申を，本気になって読む人は少ないでしょう。しかし，ヒトの生存環境にかかわる諮問であったから，このような答申が出されたという認識を持つ必要があります。森林総合研究所が，森林の多面的機能に関する研究を進めて社会に警鐘を鳴らす役目を果たせるよう努めたいと思います。

［巻頭言］［リサーチトピックス１］［リサーチトピックス２］［リサーチトピックス３］［研究解説１］［研究解説２］［研究解説３］［おしらせ］
[所報トップページへ]